博 多 161

― 博多遺跡群第207次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1341集

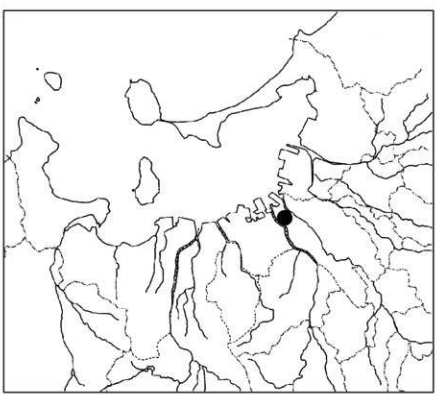
2018

福 岡 市 教 育 委 員 会

博 多 161

— 博多遺跡群第207次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1341集



遺跡略号　HKT-207
調査番号　1611

2018

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

現在，アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し，まちづくりを進めている福岡市は，古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市ではこの交流を物語る文化財の保護に努めていますが，開発によりやむを得ず失われていく遺跡については，記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は，博多区店屋町における簡易宿泊所建設に先立って行われた博多遺跡群第207次調査を報告するものです。調査の結果，中世から近世に至る遺構，遺物が発見され，当時の生活を復元するうえで多大な成果を上げることができました。本書を文化財保護や普及，教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが，発掘調査から整理，報告に至るまで，株式会社レーサム様をはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成30年３月26日

福岡市教育委員会
教育長　星　子　明　夫

例　言

1．本書は福岡市博多区店屋町170番２内における簡易宿泊所建設に先立ち，福岡市文化財部埋蔵文化財課が平成28年７月１日から平成28年８月29日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第207次調査の報告である。
2．検出した遺構については，一括して通し番号を付した。
3．本書に掲載した遺構の実測は，担当の井上巌子，藤野雅基が，写真撮影及び製図は井上が行った。
4．本書に掲載した遺物の実測は山本麻里子，光吉千里が，製図は井上，林由紀子が，写真撮影は井上が行った。
5．木製品については，実測及び所見記述を山口譲治が行った。
6．本調査の出土遺物，記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵，管理されるので活用されたい。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	207次	調査略号	HKT-207
調査番号	1611	分布地図図幅名	福岡	遺跡登録番号	401320121
申請地面積	188.76㎡	調査対象面積	188.43㎡	調査面積	147㎡
調査期間	平成28(2016)年７月１日～平成28(2016)年８月29日			事前審査番号	27-2-1029
調査地	福岡市博多区店屋町170番２				

目　次

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 2
　1．調査の経過 …… 2
　2．調査の概要 …… 2
　3．第1面の遺構と遺物 …… 6
　（1）土坑 …… 6
　4．第2面の遺構と遺物 …… 6
　（1）土器集積遺構 …… 6
　（2）井戸041 …… 8
　（3）道路状遺構 …… 9
　5．第3面の遺構と遺物 …… 14
　（1）流路020 …… 14
　（2）土器集積遺構042 …… 15
　6．第4面の遺構と遺物 …… 15
　（1）流路040 …… 15
　（2）杭列 …… 16
　（3）湿地状堆積048 …… 18
　7．第5面の遺構と遺物 …… 22
　（1）土留め施設050 …… 22
　8．トレンチ …… 22
　9．まとめ …… 22
　10．木製品 …… 23

挿図目次

第1図　調査地点の位置(1/4000) …… 3
第2図　調査区位置図(1/500) …… 3
第3図　第1・2面遺構配置図(1/100) …… 4
第4図　第3・4面遺構配置図(1/100) …… 5
第5図　第5面遺構配置図(1/100) …… 6
第6図　調査区土層実測図(1/80) …… 7
第7図　土坑・出土遺物実測図(1/40・1/3・1/4) …… 8
第8図　土器集積遺構・井戸実測図(1/20・1/60) …… 9
第9図　土器集積遺構・井戸出土遺物
　実測図(1/3・1/4) …… 10
第10図　道路状遺構・020・道路状遺構断面
　土層実測図（1/60） …… 11
第11図　道路状遺構・020出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 12
第12図　020出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 13
第13図　020出土遺物実測図(2)(1/3) …… 14
第14図　042・出土遺物実測図(1/20・1/3) …… 14
第15図　040・048実測図(1/60) …… 17
第16図　杭列実測図(1/40) …… 18
第17図　040出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 19
第18図　040・杭列出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 20
第19図　050・出土遺物実測図(1/40・1/3) …… 21
第20図　木製品実測図１(1/4) …… 24
第21図　木製品実測図２(1/8) …… 25

図版目次

図版1　1　第1面全景（北東から）　2　第2面全景（南西から）
　3　006遺物出土状況（北東から）　4　015遺物出土状況（南東から）
　5　015下面遺物出土状況（南東から）　6　035（北から）
　7　041（北東から）
図版2　1　道路状遺構（北西から）　2　道路土層断面南東側（北西から）
　3　道路中央断面（南東から）　4　道路土層断面南東壁（北西から）
　5　第3面流路020下面（西から）　6　第3面流路020（南から）
　7　042遺物出土状況（西から）
図版3　1　調査区南西側第4面全景（南西から）　2　流路040（西から）
　3　流路040（東から）　4　杭列1（南から）
　5　杭列1（東から）　6　杭列1横板（西から）
図版4　1　杭列1，3（南東から）　2　杭列1，3（西から）
　3　杭列2遠景（南から）　4　杭列2（南東から）
　5　杭列2（南から）　6　流路040底面土師器出土状況（西から）
図版5　1　流路040底面土師器出土状況（南西から）　2　流路040東岸土師器出土状況（南東から）
　3　調査区北東側第4面全景（南西から）　4　調査区北東側第4面全景（西から）
　5　調査区北東側南東壁（北から）　6　調査区北東側北西壁（南から）
　7　048底面遺物出土状況（北西から）　8　048板草履出土状況（西から）
図版6　1　048木製下駄出土状況（北から）　2　048木製下駄出土状況（南西から）
　3　048上面木製下駄出土状況（北西から）　4　木製品・漆器出土状況（南東から）
　5　048木材・遺物出土状況（北西から）　6　第5面全景（南西から）
　7　050（西から）
図版7　1　050（南東から）　2　050礫一部除去後（南から）
　3　050木柵部分（西から）　4　050木柵部分（北から）
　5　050木柵部分（北西から）　6　敷地南角トレンチ（南西から）
図版8　木製品写真

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

2016（平成28）年２月25日付で株式会社レーサムより簡易宿泊所建設にかかる事前審査申請書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課（当時）に提出された。申請地は博多遺跡群に所在し，周辺では発掘調査等により遺跡の存在が確認されていることから，建築物の基礎構造によっては発掘調査が必要なこと等について，埋蔵文化財審査課と申請者との間で協議を行い，確認調査を実施した。その結果，遺跡の存在が確認され，予定建築物の建設範囲において記録保存のための発掘調査が必要となった。その後申請者と発掘調査期間，予算，工程等について協議を行い，発掘調査のための委託契約を締結した。調査は2016（平成28）年７月１日に着手し，2016（平成28）年８月29日に終了した。

2．調査の組織

調査委託　株式会社　レーサム
調査主体　福岡市教育委員会
（発掘調査：平成28年度・資料整理：平成29年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財課	課長	常松　幹雄
		調査第１係長	吉武　　学
庶　　務	文化財部埋蔵文化財課	管理係長	大塚　紀宜（28年度）
		管理係	入江よう子（28年度）
	文化財部文化財保護課	課長	宮崎　誠二（29年度）
		管理調整係長	藤　克己（29年度）
		管理調整係	松尾　智仁（29年度）
事前審査	文化財部埋蔵文化財課	事前審査係長	佐藤　一郎（28年度）
			本田浩二郎（29年度）
		主任文化財主事	池田　祐司
		事前審査係	大森真衣子（28年度）
			中尾　祐太（29年度）
調査担当	文化財部埋蔵文化財課	主任文化財主事	井上　繭子

発掘作業　青木和代　岩永いさ子　上野道郎　真田弘二　高橋茂子　高林稔子　中村秀策　林厚子
平山瑠美　森弘品子　山下直美　山田輝人　脇田誠二
調査補助　藤野雅基
整理補助　山本麻里子　光吉千里
整理協力　山口譲治　谷直子（現九州大学）
整理作業　有島美江　林由紀子　田中朋香　冨田文代　箱嶋ひかり

Ⅱ　遺跡の立地と環境

博多遺跡群は，福岡平野北側の博多湾岸に位置し，那珂川と御笠川の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜（おきのはま）」の二つに分けられ，「博多浜」はさらに二つの砂丘から形成される。現在の博多の町は，この砂丘地形上にさらに２～５ｍほど盛土されて形成されているものの，現状でも埋没した旧地形の形状をよく反映している。

今回の博多遺跡群第207次調査地点は，博多遺跡群の北側，北側から２番目の博多浜の砂丘上，北西端部に位置する。本調査地点の南側には第124次調査地点が隣接するが，ここでは，砂丘の落ち際が湿地となり埋め立てられている状況が明らかになっている。また，16世紀代の整地された道路状遺構や一括陶磁器埋納遺構が検出されており，本調査地点でもそれらにつながる状況が想定される。

Ⅲ　調査の記録

１．調査の経過

発掘調査は，当該工事の地下への影響が及ぶ151.81㎡を対象とした。事前の試掘調査では，近世以降の攪乱が多く，地表面から約220㎝で第１面である遺構面が確認され，この上面までの盛土の除去と土留め工事を事前に事業主側で行った後，場内反転して発掘調査を行うことにした。

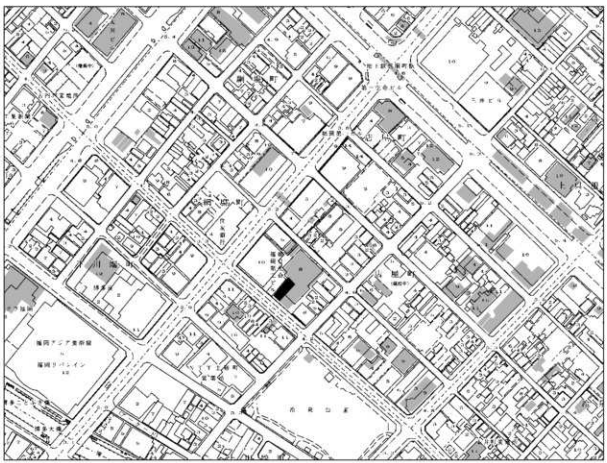
発掘調査は平成28年７月１日に開始した。調査対象範囲の南西側から人力での遺構検出及び掘削，図面作成及び写真撮影を行った。南西側の調査では４面の遺構面を設定した。北東側は，南西側の調査状況と時間上の制約から，南西側第４面に相当する上面までを重機で鋤取り，第４面からの調査を行った。最終面として調査を行ったが，精査したところ，砂丘の下面で木材と礫を使用して構築された土留め施設が検出され，この面を第５面とした。

最後に未調査部分となった敷地出入り口部分に試掘トレンチを入れて確認調査を行った。器材の撤収，片づけ，出土遺物及び器材の洗浄等を行い，平成28年８月29日に調査を終了した。

２．調査の概要

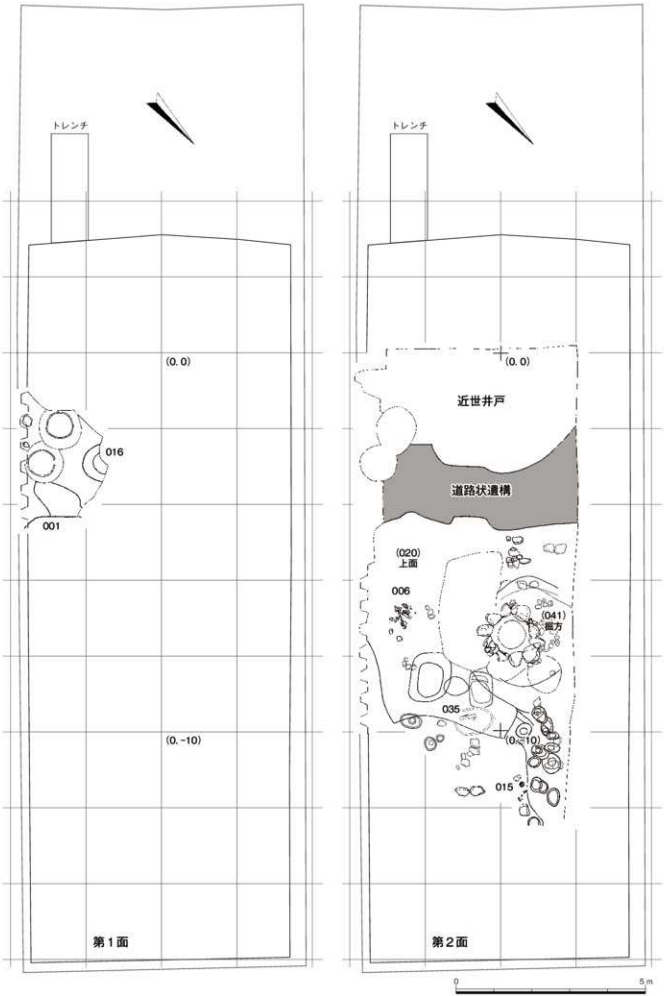
本調査地点の東側に隣接する第124次調査地点では現地表面から約150㎝下で道路状遺構の路盤が検出されており，本調査地点でこの遺構の延長の存在が想定された。しかし，実際は攪乱が多く，現地表面から約220㎝まで路盤は切り下げられていた。一部路盤の上部が残存しており，この残存範囲を第１面として設定した。近代の井戸の他，16世紀末～17世紀初頭の土坑が検出された。第２面は実質鋤取りを行った面であるが，道路状遺構の路盤下半部分と流路，土器集積遺構，柱穴，土坑が検出された。第３面は，道路状遺構の路盤の下面に相当する面で，調査区を南東から北西に横断する流路が検出されている。第４面は下層の流路，杭列，近世の石積み井側を持つ井戸，湿地状堆積が検出された。調査区の東側で砂丘が見られるが，これは博多遺跡群の内陸部で見られる基盤砂丘とは異なる。当初は第４面が最終面と想定されたが，この砂丘の落ち際を精査したところ，砂丘の流出を防ぐように設置された土留め施設が検出された。そのためこの面を第５面とした。第１，２面で検出された道路状遺構，第４面で検出された下層の流路は第124次調査地点の延長と考えられる。

以下に各遺構の記述を行う。

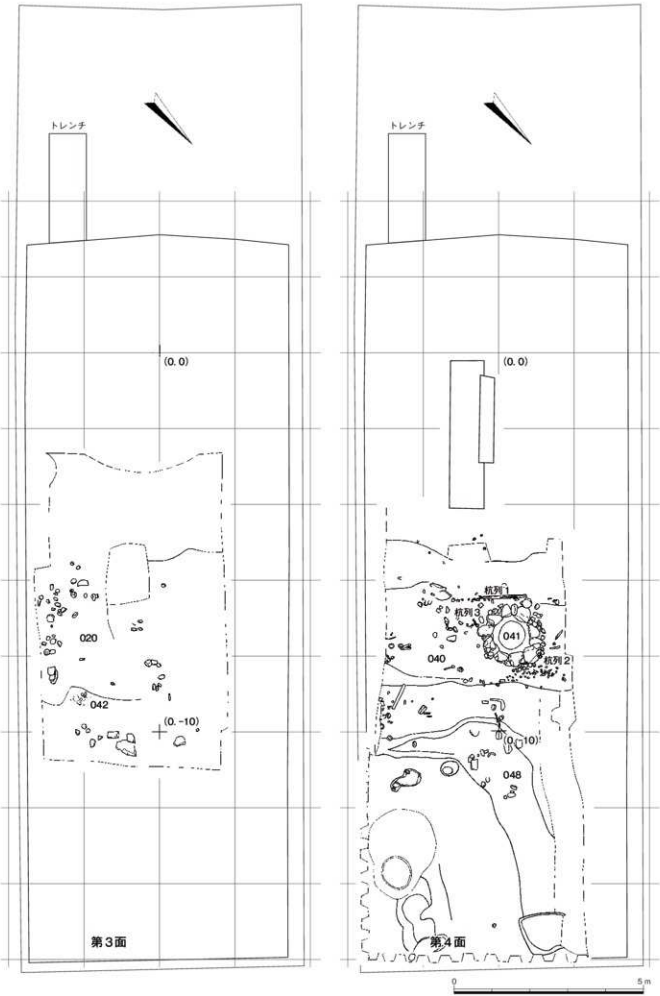


第１図　調査地点の位置（1/4000）

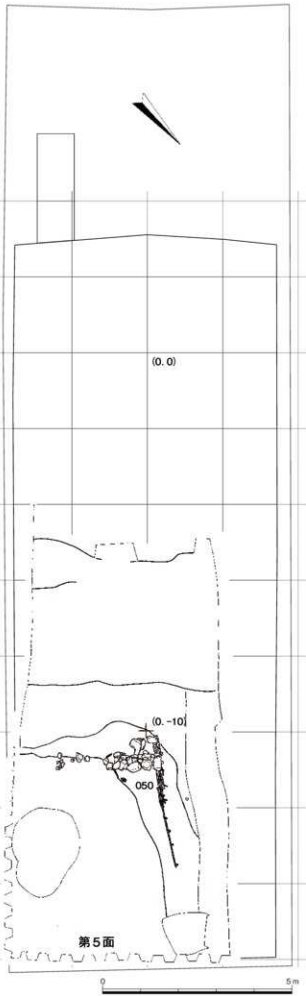
第２図　調査区位置図（1/500）



第3図　第1・2面遺構配置図（1/100）



第4図　第3・4面遺構配置図（1/100）



第５図　第５面遺構配置図（1/100）

３．第１面の遺構と遺物

第１面は前述のとおり，調査区内で一部のみの残存で，道路状遺構の路盤上面にあたる。道路状遺構が埋没した後の遺構が検出された。

（１）土坑

001（第７図）　第１面の東側に位置する。平面は推定楕円形を呈し，残長1.0m，深さ50cm。一部のみの残存だが，獣骨が出土している。16～17世紀頃。

出土遺物（第７図１～４）　１は白磁皿。畳付のみ釉を掻き取る。復元口径12.3cm，器高3.2cm，底径7.0cm。２は青花碗。外面に魚文，口縁部の内外に圏線を巡らせる。残存高3.2cm，底径4.2cm。３は青花の皿か。見込みに文様が施文される。高台内外は露胎となる。残存高3.2cm，底径4.2cm。４は備前焼の擂鉢口縁部。内面に一部摺り目が残る。

016（第７図）　第１面の北側に位置する。平面は推定楕円形を呈し，幅1.0m，残存長0.7m，深さ35cm。16～17世紀頃。

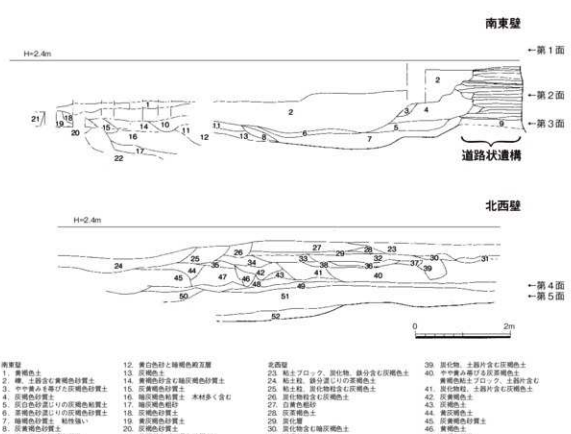
出土遺物（第７図５～８）　５は陶器碗。淡黄色の胎土で内面及び外面体部に釉がかかる。残存高2.9cm，復元底径4.8cm。６は肥前系陶器の鉢。明茶褐色胎土に銘褐色の釉がかかる。７は土師器皿。底部は糸切り離し。復元口径9.2cm，器高1.3cm，復元底径6.9cm。８は丸瓦。内面は縄目の調整が見られる。残存幅9.6cm，残存長8.4cm，厚さ2.0cm。

４．第２面の遺構と遺物

実質的な第１面である。道路状遺構路盤，土器集積遺構，井戸などが検出された。なお，この面で流路020の上面が検出されているが，流路020については第３面で説明を行う。

（１）土器集積遺構

006（第８図）　調査区中央西寄りで検出した。陶磁器，土師皿，瓦などが投棄されている。この遺構は流路020の上部で検出したものである。16世紀後半頃か。



南東壁
1. 黄褐色土
2. 褐、土器含む黄褐色砂質土
3. やや黄みを帯びた灰褐色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 灰白色砂混じりの灰褐色粘質土
6. 茶褐色砂混じりの灰褐色砂質土
7. 暗褐色砂質土　粘性強い
8. 灰黄褐色砂質土
9. 黄み帯びた灰褐色粗砂
10. 灰褐色土
11. 灰褐色砂質土
12. 黄白色砂と暗褐色粗互層
13. 灰褐色土
14. 黄褐色砂混じり暗灰褐色砂質土
15. 灰黄褐色砂質土
16. 暗灰褐色粘質土　木材多く含む
17. 暗灰褐色粗砂
18. 灰褐色砂質土
19. 黄灰褐色砂質土
20. 灰褐色砂質土
21. 井戸掘方（灰褐色砂質土）
22. 黄褐～白黄色粗砂

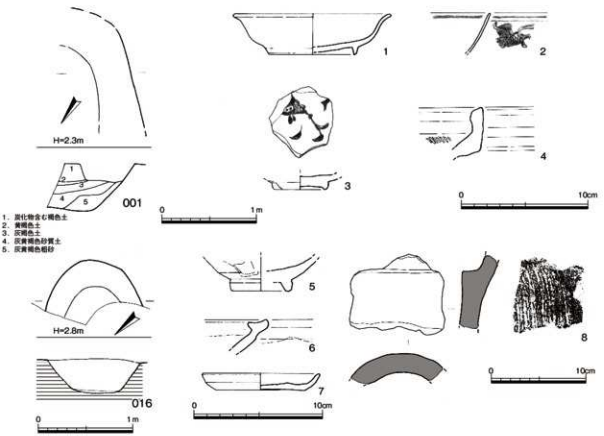
北西壁
23. 粘土ブロック、炭化物、礫分含む灰褐色土
24. 粘土粒、礫分混じりの茶褐色土
25. 粘土粒、炭化物粒含む灰褐色土
26. 炭化物粒含む灰褐色土
27. 白黄色粗砂
28. 灰茶褐色土
29. 炭化層
30. 炭化物含む暗灰褐色土
31. 灰褐色砂
32. 炭化物混じりの灰褐色土
33. 灰褐色土混じりの黄褐色粗砂
34. 黄褐色粘土粒含む灰黄褐色土
35. 黄褐色土
36. 黄白色粗砂
37. 遺構　土師器あり
38. 炭化物含む灰黄褐色土
39. 炭化物、土器片含む灰褐色土
40. やや黄み帯びる灰茶褐色土
黄褐色粘土ブロック、土器片含む
41. 炭化物粒、土器片含む灰褐色土
42. 灰黄褐色土
43. 灰褐色土
44. 黄灰褐色土
45. 灰黄褐色砂質土
46. 黄褐色土
47. 灰褐色粗砂
48. 黄色砂含む灰褐色砂質土
49. 灰褐色砂質土　やや粘性あり
50. 暗灰褐色砂質土（040）
51. 暗灰褐色粘質土
炭木、板材多く含む（048）
52. 暗灰褐色粘質土

第６図　調査区土層実測図（1/80）

出土遺物（第９図１～12）　１，２は青花皿。１は見込みと体部外面に文様が付される。畳付は露胎となる。残存高1.3cm，復元底径7.4cm。２は碁簏底。見込みに菊花文が施される。畳付は露胎となる。器高2.3cm，復元底径3.2cm。３は陶器碗。黄白色の胎土に全面釉がかかる。畳付に４カ所砂目がつく。口径13.8cm，器高7.9cm，底径5.7cm。４は瓦質の釜。胴部最大径は28.7cm。残存高8.2cm。５～７は土師器坏。口径9.4～9.8cm，器高1.5～1.9cm，底径6.4～7.2cm。底部は糸切り離し。８～10は土師器皿。口径5.8～7.3cm，器高1.3～1.7cm，底径5.0～5.8cm。底部は糸切り離し。11は軒丸瓦。三巴文の周囲に珠文を配する。復元瓦当径13.6cm。12は軒平瓦。均整唐草文を配する。

015（第８図）調査区西寄りで検出した土師器の集積遺構。２個体の土師器坏が口を合わせた状態で検出された他，土師器坏，土師器皿，礫が散布していた。土師器による埋納祭祀が行われていたと考えられる。15～16世紀代。

出土遺物（第９図13～16）　13～15は土師器坏。口径は11.2～11.8cm，器高1.8～2.4cm，底径6.7～8.1cm。すべて糸切り離し底部。16は土師器皿。口径7.4cm，器高1.4cm，底径5.6cm。糸切り離し底部で板圧痕が残る。



第７図　土坑・出土遺物実測図（1/40・1/3・1/4）

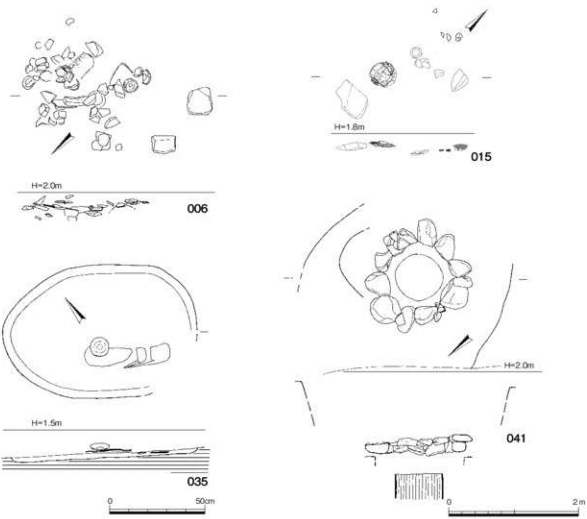
035（第８図）　調査区の東寄りで検出した。板状の木質部上に２枚の土師器坏が重ねられた状態で確認された。16世紀代。

出土遺物（第９図17，18）　17，18は土師器坏。口径11.0，10.2cm，器高2.7，2.2cm，底径7.5，7.4cmである。底部は糸切り離しで，板圧痕が残る。

（２）井戸041（第８図）

調査区の北寄りで検出した石組の井戸である。第２面での検出は掘方のみで，石組の井側や結桶の井筒が確認されたのは第４面である。しかし掘方の検出面が第２面であり，井戸は道路や流路より後世に掘りこまれたことが推定されるため，第１面遺構として説明を加える。この面で検出された掘方は明瞭ではなく，径は３m程度の平面円形である。掘方や近辺に礫が散在していたのは，井側である石組やその裏込め石が崩落したものと考えられる。掘方検出面から約１m下で井側である石組が確認された。井側内には結桶である井筒が検出されたが，後述するように流路内であり，湧水が激しく底部までは掘削不可能であった。16世紀以降。

出土遺物（第９図19～25）　19は白磁碗の底部で，転用品。底径5.6cm。内面と高台外面に釉がかかる20～22は龍泉窯系青磁碗。20は外面に雷文が施される。復元口径15.0cm。21は口縁部が内碗する。内面及び外面に釉がかかるが，高台は露胎となる。復元口径10.9cm，器高4.7cm，底径4.4cm。22は碗の底部。見込み及び外面に櫛目文状の文様が見られる。高台底部は露胎となる。底径3.8cm。23は土鍋の口縁部。すすが付着する。24，25は平瓦。

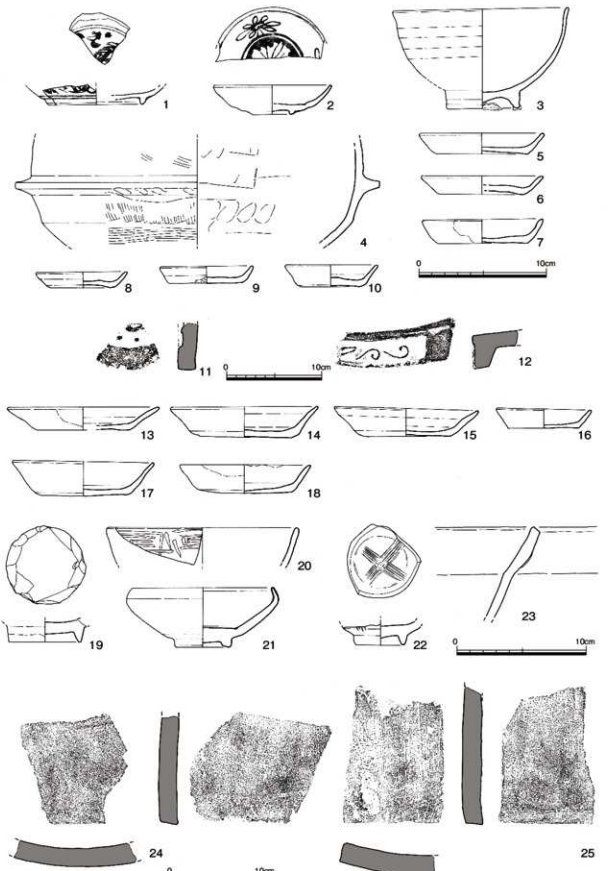


第８図　土器集積遺構・井戸実測図（1/20・1/60）

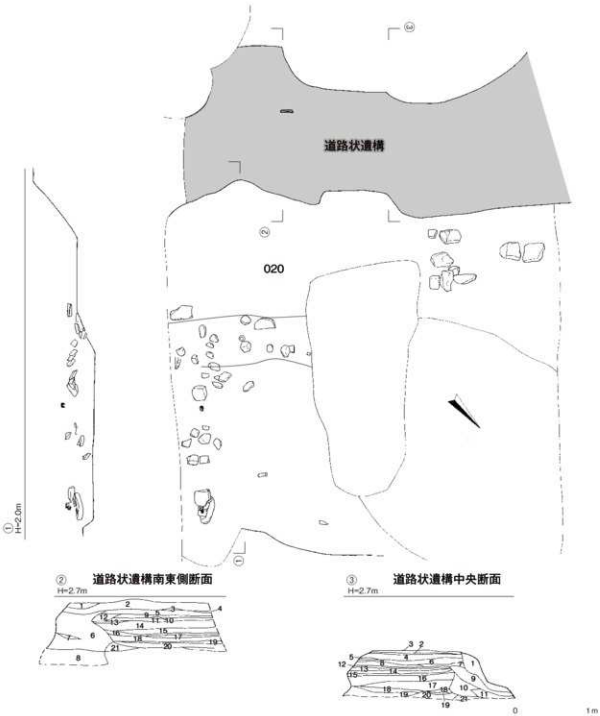
（３）道路状遺構（第10図）

前述したとおり，道路状遺構は大部分が下層のみの残存であったが，一部上層まで残存していた。少なくとも１m以上の高さがあったと推定される。これは隣接の124次調査で確認された所見と矛盾するものではない。南東－北西の方向に走り，124次調査で確認された道路状遺構の延長である。道路状遺構の路盤は目の粗い砂や炭化物などを層状に叩き締めて構築している。非常に硬く，掘削に鍬を用いても弾き返されるほどの硬度であった。道路状遺構の南西側は近世以降の井戸の掘方で切られ，北東側は後述する流路020で切られている。道路という性格上路盤中から出土した遺物は破片が多い。遺物から，少なくとも16世紀代まで改修されながら使用されていたと考えられる。

出土遺物（第11図１～17）　１は龍泉窯系青磁碗の口縁部。外面にヘラ彫りによる雷文が施される。２は朝鮮系陶器碗の口縁部。３は陶器碗。淡茶色の胎土で内外面に暗茶色の釉がかかる。復元口径12.3cm，残存高4.6cm。４は土鍋。外面にすすが付着している。５は粉青沙器の碗。内面に白化粧土による刷毛目文様が施され，釉がかけられる。見込みと畳付に目跡が残る。底径4.1cm。６は陶器の擂鉢。内面に摺り目が３条残る。７，８は土師器坏。口径いずれも10.6cm，器高2.1，2.3cm，底径7.3，8.0cm。糸切り離し底部で，８には板圧痕が残る。９，10は土師器皿。口径7.4，7.2cm，器高1.9，1.0cm，



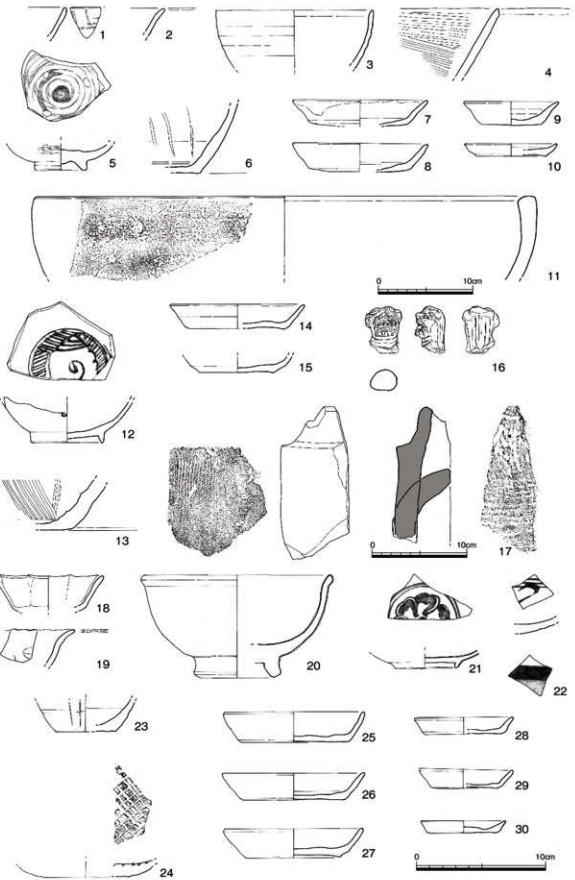
第９図　土器集積遺構・井戸出土遺物実測図（1/3・1/4）



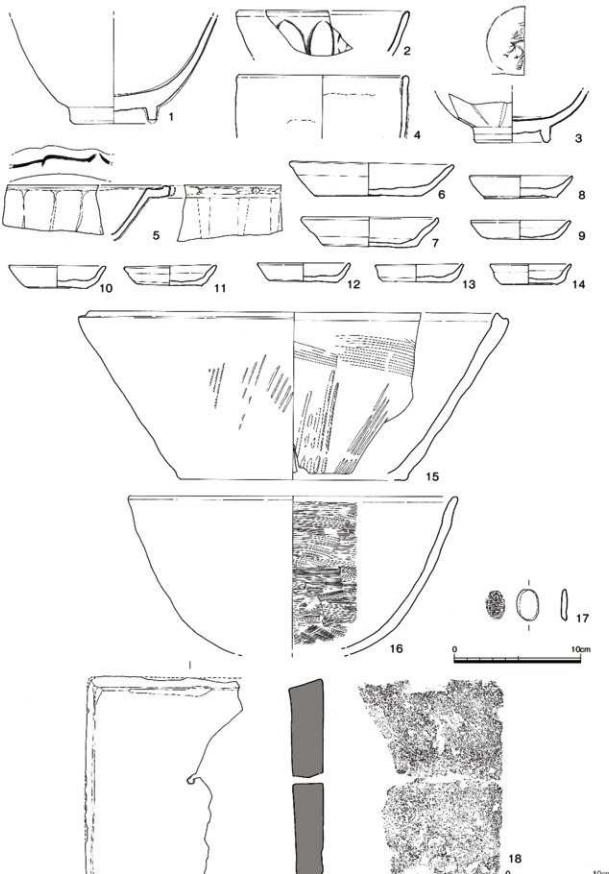
1. 黄褐色土含む灰黄褐色粘質土
2. 赤褐色土 炭化物混じりの暗褐色土（硬い）
3. 灰褐色砂質土
4. 炭化層
5. 灰黄褐色砂質土
6. 灰褐色砂質土（井戸掘方）
7. 黄褐色粘質土（井戸掘方）
8. 灰黄褐色砂質土（井戸掘方）
9. 炭化層混じる白黄褐色粗砂
10. 炭化層
11. 炭化層状に灰黄褐色粗砂
12. 白黄色粗砂
13. 炭化層
14. 黄白～灰黄色粗砂
15. 黄白色砂はさむ灰褐色粗砂
16. 暗褐色粗砂
17. 黄灰色粗砂
18. 灰色粗砂
19. 黄白色粗砂混じりの灰褐色砂
20. 炭化層混じりの灰褐色砂
21. 灰白色粗砂

1. 灰茶褐色粗砂（黒）
2. 灰白色粗砂
3. 灰褐色砂質土 粘性あり
4. 黄白色粗砂
5. 白黄色粗砂
6. 黄褐色粗砂混じりの灰褐色粗砂
7. 明黄褐色砂質土
8. やや暗い灰褐色粗砂
9. 黄褐色砂混じりの灰褐色砂質土
10. 9よりもやや暗い灰褐色粗砂黄褐色砂混じる
11. 灰褐色粗砂混じりの黄褐色粗砂
12. 暗褐色砂質土
13. 黄褐色砂層状に灰褐色砂質土
14. 黄褐色砂状に灰褐色砂質土 炭化物混じる
15. 灰黄～灰白色粗砂
16. 黄褐色粗砂混じりの黄灰色粗砂
17. 黄褐色粗砂混じりの暗灰褐色粗砂 炭化物少量混じる
18. 黄褐色粗砂混じりの灰褐色粗砂
19. 18よりやや暗い粗砂
20. 暗褐色砂質土
21. 灰白色粗砂

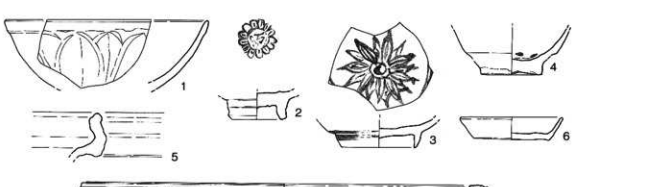
第10図　道路状遺構・020・道路状遺構断面土層実測図（1/60）



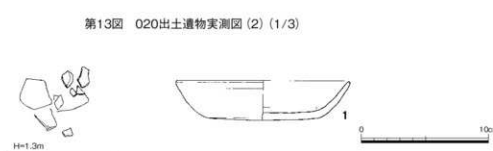
第11図　道路状遺構・020出土遺物実測図（1/3・1/4）



第12図　020出土遺物実測図（1/3・1/4）



第13図　020出土遺物実測図（2）（1/3）



第14図　042・出土遺物実測図（1/20・1/3）

底径4.8，5.5cm。糸切り離し底部。11は瓦質の火鉢。復元口径53.2cm，残高8.3cm。口縁部外面に菊花のスタンプ文が巡る。12は青花碗。見込みと外面に文様を施し，全面に透明釉をかける。畳付は釉を掻き取る。復元底径5.8cm，残存高3.2cm。13は備前焼の擂鉢。内面に摺り目が残る。14，15は土師器坏。14の口径は10.6cm，器高1.9cm，底径8.2cm。15は底径6.0cm。糸切り離し底部。16は白磁の人形の頭部。獅子をかたどる。17は丸瓦。内外面に縄目が残る。

5．第３面の遺構と遺物

第３面は道路状遺構の路盤を除去した下面とし，流路，土器・礫集積遺構を確認した。

（１）流路020（第10図）

020は調査区の中央を南東－北西の方向に道路状遺構に平行して走る流路である。流路の南西肩は道路状遺構の北東側を切っている。020の下層は後述する流路040となるが，土層断面から040の埋没後に掘削していると推定されることから040とは別遺構として処理している。なお，020の下面は，道路状遺構を切り下げながらの掘削となったため，掲載している図面は合成して作成したものである。出土遺物は14世紀～16世紀頃までと幅広い。

出土遺物（第11図18～30，第12，13図）　第11図18は白磁の八角坏。復元口径8.6cm，残高2.9cm。19は白磁の輪花碗。内面に劃花文が施される。20は青磁碗。内外面に厚く施釉される。高台内は露胎となる。復元口径15.0cm，器高8.2cm，復元底径6.8cm。21は青花皿。見込み内面に捻花文が施される。畳付は露胎となる。22は白磁鉄絵皿。磁州窯か。23は陶器壷。復元底径4.7cm，残存高2.6cm。24は瀬

戸焼の卸皿。復元底径6.6cm。25～27は土師器坏。口径11.0～11.1cm，器高2.1～2.4cm，底径7.4～8.3cm。糸切り離し底部で26は板圧痕がある。28～30は土師器皿。口径6.7～7.8cm，器高1.0～2.3cm，底径5.2～6.0cm。糸切り離し底部で28は板圧痕が残る。

第12図1～3は青磁碗。1は淡緑色の透明釉を厚くかける。高台内は輪状に掻き取る。復元底径6.9cm，残存高8.4cm。2はヘラ切りの蓮弁文が施される。復元口径13.2cm，残高3.7cm。3は見込みには印花文，外面には崩れた蓮弁文が施される。4は青磁の香炉。復元口径13.4cm，残存高5.0cm。5は稜花鍔大皿。厚く釉がかかる。6，7は土師器坏。口径12.9，10.6cm，器高2.4，2.3cm，底径8.4，9.6cm。糸切り離し底部。8～14は土師器皿。口径6.3～8.0cm，器高1.4～1.9cm，底径4.3～5.6cm。糸切り離し底部で12は板圧痕が残る。15は土師質の擂鉢。内面に5条の摺り目が残る。復元口径32.0cm，器高13.3cm，復元底径18.2cm。16は土鍋。内面はハケメ調整が見られる。外面はすすが付着している。17は土製のおはじき。片面に条線と木の葉形の線刻が施される。18は平瓦で釘留めの孔が穿たれている。

第13図1は龍泉窯系の青磁碗。外面に方切り彫りの蓮弁文が施される。復元口径15.8cm，残存高5.4cm。2は青磁碗の底部。見込みに印花文が施され，「万」の字が見られる。高台内部は露胎となる。3は青花の碗。見込みには重圏線内に花文が，高台気部付近には重圏線が巡らされる。畳付は露胎となる。底径5.8cm。4は陶器の碗。全面に釉がかかり，見込みと畳付に砂目がつく。底径4.9cm。5は備前の擂鉢。6は土師器皿。口径8.1cm，器高1.9cm，底径6.0cm。糸切り離し底部。7は陶器鉢。内外面に自然釉がかかる。復元口径29.4cm。

（2）土器・礫集積042（第14図）

割石などの平板な石の集積とともに土師器が検出された。

出土遺物（第14図1） 土師器坏。口径13.8cm，器高3.0cm，底径13.4cm。糸切り離し底部。

6．第4面の遺構と遺物

第4面は調査区南西側の流路040を完掘した面及び調査区北東側の同一レベルの面である。調査区南西側では，流路020の下層で流路040，それに伴う杭列，調査区北東側では北角から南東壁際にかけて黒褐色粘質土の堆積が見られた。この黒褐色粘質土は木質，木製品，土器などを含み，124次調査地点の所見と合わせて湿地状堆積と考えられる。この堆積土を040が切っており，湿地が土壌化して陸地化した後に流路040が流れた経緯が窺える。

（1）流路040（第15図）

流路020の下層で検出された。暗褐色土の埋土を主体とし，下層は粗砂となる。陶磁器，土師器の他，箸などの木製品，漆器などが出土している。040の底付近から041の石組井側が検出され，041を挟むように杭列1，2，3が検出された。この杭列は040の両岸に沿って設置されており，040に伴うものと考えられる。出土遺物は14～15世紀代である。124次地点の成果から，040の下層にも流路がある可能性はあるものの湧水が激しく掘削は不可能であった。なお，出土木製品や杭列の木材については主なものについて別章で述べる。

出土遺物（第17図，第18図1～8） 第17図1は碁簾底の白磁皿。底部外面は露胎となる。口径10.3cm，器高2.9cm，底径4.3cm。2は瓦器の坏。底部付近に穿孔が見られる。復元底径5.8cm。3は青磁の腰折稜花皿。見込みに圏線と印花文，口縁部に劃花重稜花線がヘラで施される。高台内部は輪状に釉を掻き取る。復元口径14.7cm，器高3.7cm，底径6.8cm。4は白磁八角坏。高台内部に圏線と「七」字

が墨書で施される。底部から高台は露胎となる。口径7.8cm，器高3.7cm，底径3.2cm。5は軒平瓦。宝珠文と唐草文が配される。6は滑石製の紡錘車。外径4.5cm，孔径1.1cm。1～6は河川の上層部から出土している。7は天目碗。高台内に墨書が見られる。底径4.1cm，残存高4.0cm。8は土師器坏。復元口径13.0cm，器高2.6cm，底径9.0cm。糸切り離し底部。9は土師器皿。口径6.5cm，器高0.9cm，底径5.8cm。糸切り離し底部。10は土師器皿の転用土製品。径6.5cm，器高0.9cm，底径5.8cm。11は羽口。復元口径8.0cm，復元内径3.0cm，残存高10.4cm。12は平面方形の火鉢。外面に梅花文が型押しされる。13は軒丸瓦。三巴文が配される。軒面の径11.8cm。7～13は河川底面付近から出土している。14～18は土師器坏。口径12.6～13.1cm，器高2.4～3.1cm，底径8.3～8.8cm。糸切り離し底部。19，20は土師器皿。口径いずれも7.7cm，器高1.5，1.4cm，底径5.3，6.1cm。糸切り離し底部で，20は板圧痕が見られる。21は瓦質の片口鉢。復元口径31.4cm，残存高4.2cm。22は平瓦。14～22は河川南東壁際に集積していたものである。第18図1は天目碗。復元口径12.1cm，残存高5.4cm。2～5は土師器坏。口径12.0～13.0cm，器高2.5～2.8cm，底径8.2～8.6cm。糸切り離し底部。6～8は土師器皿。口径6.7～7.4cm，器高1.3～1.5cm，底径5.1～5.6cm。糸切り離し底部で，8は板圧痕が残る。

（2）杭列（第16図）

前述のように流路040の北西寄り両岸際及び河川中央で検出された。

杭列1

杭列1は河川の南西岸に沿って設置されている。杭列と表現しているが，幅10cm，長さ1m程度の板材3枚を横に据え，長さ1m以下の杭で留めている。杭列の残存幅は1.8mであるが，杭の残存状況から板材及は南東方向に延長して存在していたと考えられる。板材から岸寄りに径が10cm程度の丸太杭が打ち込まれていた。この丸太杭が板材と杭列に伴うものかは判然としないが，杭下端のレベルが杭列のそれより高いことから，杭列より後世の設置と思われる。使用されている板材及び杭は建築部材を転用しているものである。これについては後述する。板材が杭列より岸側に設置されていることから，この杭列は河川の氾濫を防ぐものというよりは，岸から河川への土の流入を防ぐ土留め的な性格を持っていたと推定される。

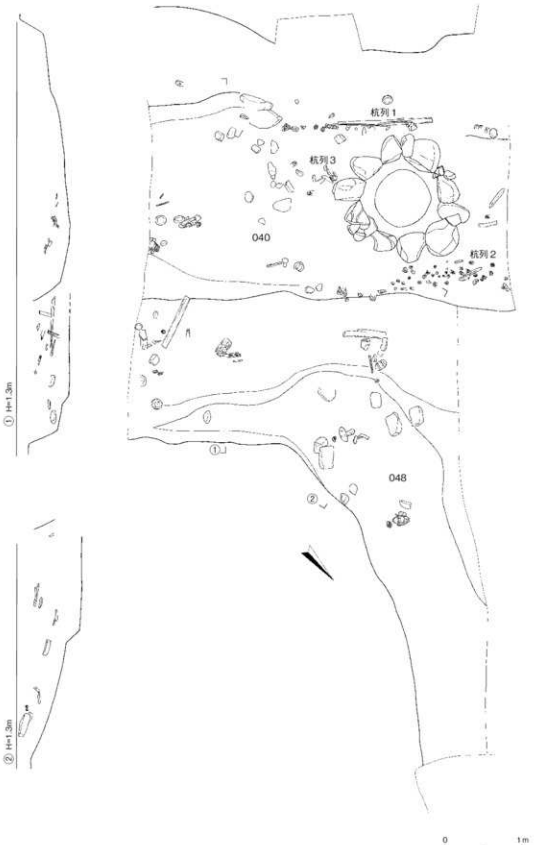
杭列2

流路の北東岸際に沿って設置してある杭列である。流路の北西寄りに幅2mの範囲で集中している。長さ70cm以下の杭が密集して打ち込まれている。この杭列も対岸の杭列1と同様に土留め的性格を有していると推定される。

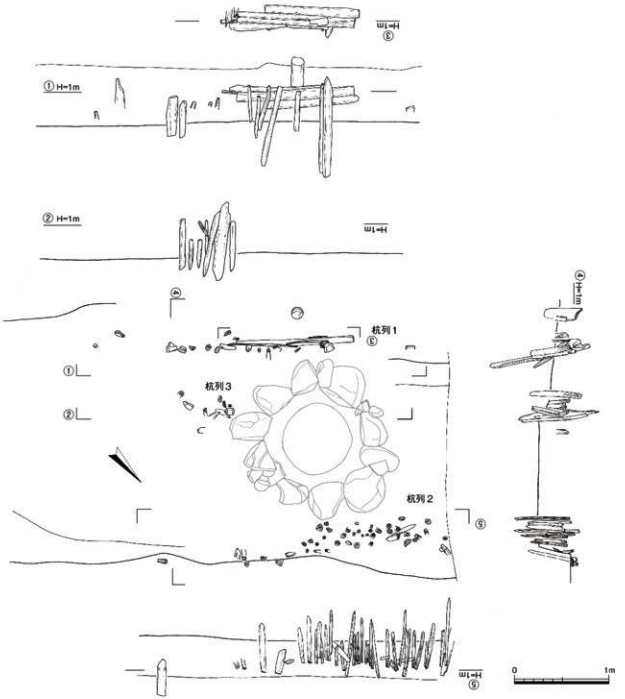
杭列3

流路の中央寄り，杭列1の北東側に位置している。杭列としたが，7本程度の杭を打ち込んでいるものである。本来北西側にも延びていたものが後世の井戸により切られたものと思われる。

出土遺物（第18図9～16）　9，11～13，15は杭列1の付近から出土した。9は青磁碗。見込みに圏線と印花文を配する。高台は露胎となる。底径5.3cm，残存高3.4cm。11は土鍋。12，15は土師器坏。口径13.0，12.6cm，器高2.6，2.2cm，底径9.7，9.2cm。糸切り離し底部で，15の底部には焼成後穿孔が見られる。13は土師器皿。口径8.0cm，器高1.4cm，底径7.2cm。糸切り離し底部。10，16は杭列2の付近から出土した。10は軒平瓦。唐草文を配する。16は平瓦。14は土師器皿。口径8.0cm，器高1.6cm，底径6.0cm。糸切り離し底部。



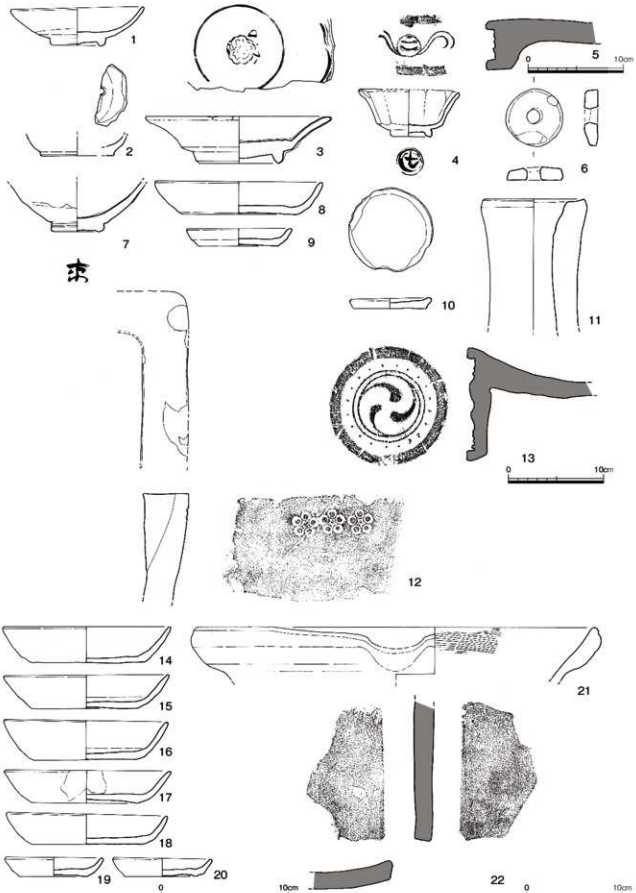
第15図　040・048実測図（1/60）



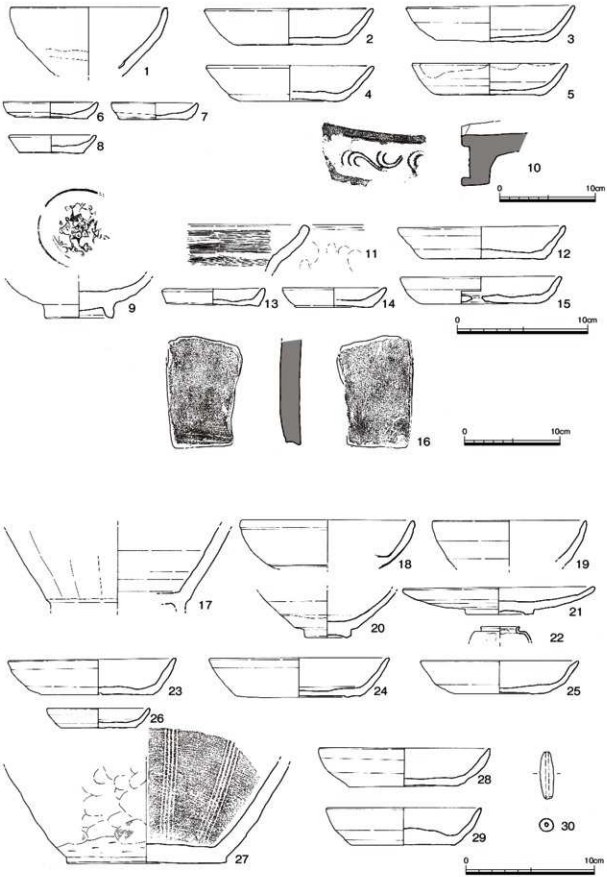
第16図　杭列実測図（1/40）

（3）湿地状堆積048（第15図）

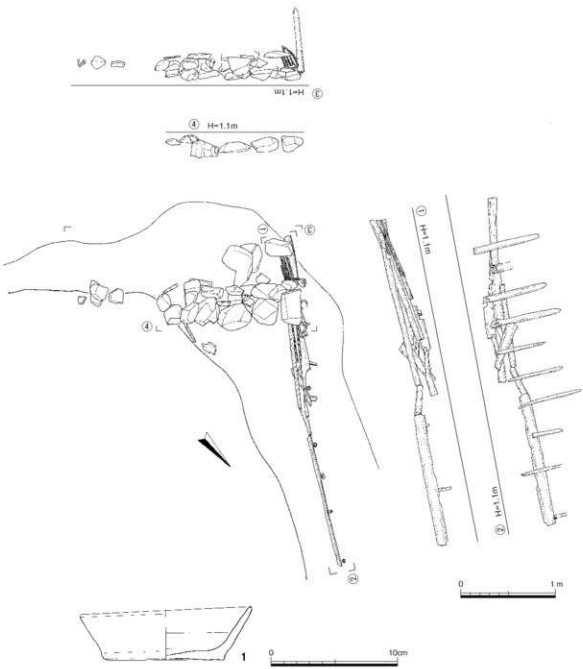
調査区の北東側の灰黄色粗砂層が西に向かって傾斜して落ち，黒褐色粘質土層が堆積している。検出当初は流路の一部かと思われたが，土層の状況から，124次調査地点で検出されているような湿地であったと推定される。ただ，124次調査地点で指摘されている埋め立てとは様相を異にしているようである。土層からは下駄などの木製品や漆器，土師器が多く出土し，生活用品が流れ込んだ，または廃棄した様相が窺える。出土遺物や流路040との切り合い関係から埋没時期は14世紀～15世紀代か。ここでも主な木製品について別章で述べる。



第17図　040出土遺物実測図（1/3・1/4）



第18図　040・杭列出土遺物実測図（1/3・1/4）



第19図　050・出土遺物実測図（1/40・1/3）

出土遺物（第18図17～30）　17は龍泉窯系青磁の瓶。器壁外面は面取り加工がなされる。淡緑色の釉が内外面にかけられる。復元底径は10.6cm，残存高6.4cm。18は青磁碗。灰緑色の釉が全面にかけられる。復元口径13.6cm，残存高3.8cm。19，20は天目碗。19は灰色の胎土に茶褐色～黒褐色の釉がかけられる。復元口径12.0cm，残存高3.6cm。20は淡灰黄色の胎土に黒褐色～茶褐色の釉がかけられる。底径3.6cm，残存高3.8cm。21は黒釉陶器の皿。灰色の胎土に黒色の釉を厚くかける。見込みの釉は輪状に掻き取る。復元口径14.8cm，器高2.1cm，底径5.3cm。22は褐釉陶器の小壺。頸部内面～外面に暗褐色釉がかけられる。復元口径3.0cm，残存高1.1cm。23～25は土師器坏。口径12.2～14.0cm，器高2.6～3.1cm，底径6.8～9.5cm。糸切り離し底部。26は土師器皿。糸切り離し底部で板圧痕が残る。口径8.0cm，器高1.5cm，底径6.0cm。27～30は南東壁際に集積していた。27は土師質の鉢。復元底径12.4cm，

残存高8.0cm。28，29は土師器坏。口径13.3，12.0cm，器高3.0cm，底径8.6，8.2cm。糸切り離し底部。30は土錘。長さ3.0cm。

7．第5面の遺構と遺物

第5面は調査区南東側の土留め施設050が検出された灰黄色粗砂層の下層とした。湿地状堆積048を掘削し，確認のために陸地部である灰黄色粗砂層にトレンチを入れたところ2段に組んだ礫とそれに直交するように設置された土留め施設が検出された。時系列としては，050の構築後，湿地の埋没という順と考えられる。そのため，この050は124次調査地点で検出されたような埋め立てのための施設とは異なると思われる。

土留め施設050（第19図）

湿地状堆積048に接する陸地部の際に沿わせるように設置されている。木材による土留め施設は東北東－西南西の方向に設置されている。幅10cm，長さ1.3m以下の板材を数枚横方向に据え，およそ30cm間隔で杭を打ち込んで留めている。検出時，板材は重なった状態であったが，本来は数枚の板を上部に積み重ねて留めていたものと考えられる。そしてこの土留め施設に直交する方向で石組列が検出された。幅30cm以下の礫を1～2段積んでいる。板材が落ちて重なっている上部に礫が積まれている状況から，木材の土留め施設の設置後に石組列が設置されたという時系列が考えられる。これらの施設は，流路040に設置された杭列と同様，陸地部の土が流出するのを防ぐ目的で設置されたものと考えられる。

出土遺物（第19図1） 木材土留め施設の際で検出された。土師器坏で口径13.5cm，器高3.9cm，底径9.5cm。糸切り離し底部で板圧痕が残る。

8．トレンチ

敷地南西部分は車両の出入り部分で調査不能部分となったため，トレンチを入れて確認調査を行った。明確な遺構は検出されなかったが，現地表面から160～290cm下の間で，土鍋，火鉢，土師器などの遺物，木片を含む灰茶褐色～灰褐色の砂質土層が確認された。土層の状況から，河川や入江等に由来する堆積と考えられる。

9．まとめ

本調査地点は，博多遺跡群の中央付近に位置する博多浜の北西端の落ち際に立地し，今回の調査でその状況が明らかとなった。東に隣接する124次調査地点で検出された道路状遺構，溝の延長及び砂丘の北側の落ちが確認された。本調査地点の主な様相を時系列でみていく。

まず，15世紀以前に砂丘と湿地（048）が形成されていた。砂丘の砂が流出するのを防ぐために土留め施設（050）が砂丘の際に構築される。15世紀前後には陸地化した湿地の南西側に流路（040）が流れるようになった。流路には土砂が流路に流入しないための土留め施設が流路両岸に設置されている。この流路は15世紀代には埋没しているようだ。一方で，流路040の埋没前後に道路状遺構の路盤の構築が始められるが，流路に削られたりしながら改修を重ね，16世紀代まで使用されていた。また，流路040の後の流路020も16世紀には埋没している。流路が埋没した後に，土器集積（006），井戸（041）の掘削が見られる。16世紀後半から17世紀初頭頃であろう。

以上のように，本調査地点では，陸地面を整備し，流路を引き，道路を築いて居住域を形成していったことが窺える。

10. 木製品

本調査では，下駄や草履の服飾具，漆器椀などの容器，箸などの食事具，計量具，建築部材，板などの施設材・器具材などの木製品が護岸構築材として再使用された形で出土した。漆器容器などは井戸や土坑からも出土した。これらの出土木製品は陶磁器などの共伴遺物から15～16世紀に製作使用されたものといえる。また，ここでは，日本列島出土木製品分類表（伊藤隆夫・山田昌久編2012『木の考古学』海青社）に準拠し，分類群ごとに触れていく。

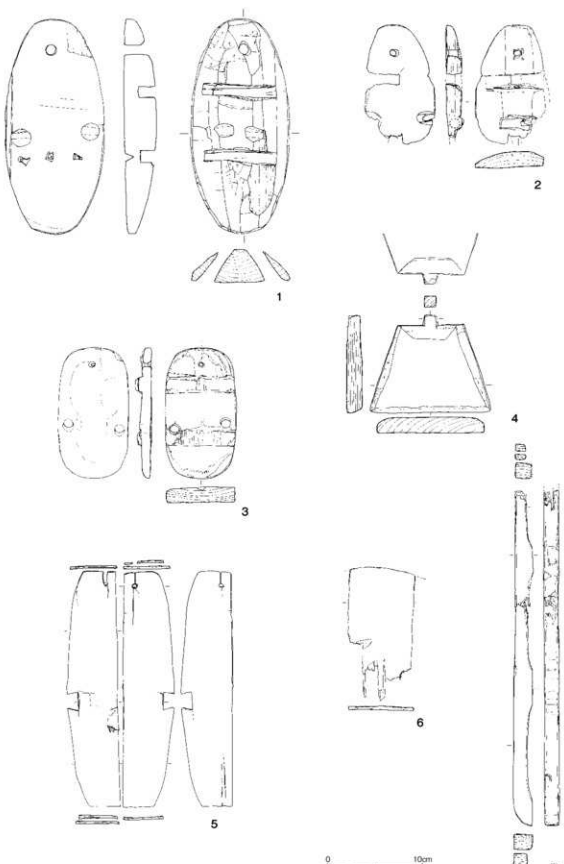
服飾具（第20図1～5）本調査では，履物の下駄（1～4）と板草履（5）が出土した。1は，スギの板目取り材を用いた組み合わせ連歯下駄の台で，表に3個の爪痕があり，裏面から側面は挽きで整形したか。鼻緒かけの孔は表から矢板鉄棒状のもので穿孔している。右足用で長さ22.7cm，幅10.4cm，最大厚3.45cmを測り，048出土。2もスギの板目取り材を用いた組み合わせ連歯下駄の台であるが，前後の歯組み合わせ部のほぼ中央に方形の柄孔を穿っている。長さ22.5cm＋αは変わらないと思うが，本体は圧縮変形が進んでいるため一部復元実測したため幅・厚さは異なるため断りしておく。なお，鼻緒の一部が残っている。杭列2出土。3もスギの板目取り材を用いた組み合わせ連歯下駄の台であるが，1・2の平面形を楕円形状に仕上げているのに比べ隅丸長方形をなしている。長さ13.8cm，幅8.4cm，厚さ1.7cmを測る。子供左足用で048出土。4はスギのナナメ取り材を用いた柄を持つ組み合わせ下駄の差し歯で，長さ13cm，着地部幅12.75cm，組み合わせ部幅7cm，柄長さ1～1.2cm，柄幅1.1～1.5cmを測り，台との組み合わせに膠を使用したと考えられ，組み合わせ部に膠痕が見られる。杭列2出土。以上の他，044・048・杭列2でスギの板目取り材を用いた組み合わせ連歯下駄の台が，044・杭列2でスギのナナメ取り材を用いた下駄の差し歯が出土している。

5は，ヒノキの板目取り材を用いた板草履で，少し圧縮変形しているが長さ24.85cm，幅11cm，厚さ0.4cmを測る。048出土。040からも長さ15.4cmを測るスギの板目取り材を用いた板草履が出土している。

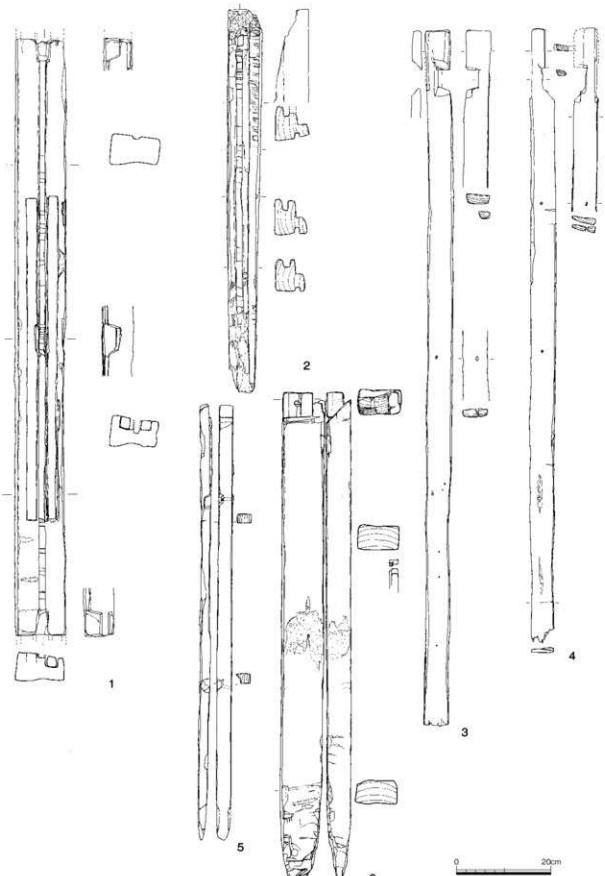
容器　挽物の漆器と曲物や板物の蓋板・底板がある。挽物の漆器は，椀・皿・瓶が出土している。椀は低い高台を持ち，高台径が043出土のものが8.8cm，048出土のものが9cmと大きく，下膨れの底から直に立ち上がり口縁はやや外反気味となる器形をなす大型のものである。椀は043・048で3点，020で出土しており，多くは，外側は黒下地にハギなど秋の植物をカキ色で彩色して描いている。見込みも同じ絵が描かれているものが多いが，見込みから内側はカキ色のみのものや，外側はカキ色下地に黒で笹を描いているものもある。048出土のものは，椀と同じ構成の絵柄を持つ皿も出土しているほか，遺構検出面出土のものは，黒下地にカキ色で巴文を描いた小瓶も出土している。以上の他，漆膜のみや小片の漆器があり，鉢や蓋などもあると考えられる。

曲物の側板が杭列2で，板物の蓋や桶の底板が039で出土している。蓋は，クスノキの板目取り材を用い，両側が13.4cmとやや膨らみ，両小口が10.5cmを測り，片方小口に長さ2.5cmの把手を設け，片面に魚を線描きしている。食事具の鍋敷きの可能性もあるが，絵画面がやや盛り上がっており，蓋とした。桶の底板は，スギの板目取り材を用い，半円状をなしており，厚さが2cmあり，片面が広いことから落とし込みの底と考える。

食事具（第20図7）　7はスギの板目取り材を用い，中央に2か所の造り出しを設け，着地部を外反し，片端に組み合わせ部の切り込み（または柄孔）を持つ棒で，膳の脚と考えた。調度の案の可能性もある。長さ35.35cm，幅1.65cm，厚さ2cmを測る。048出土。以上の他，食事具は箸・御敷が出土している。箸は，いずれもヒノキの板目取り材を用い，横断面は0.5cmの前後の方形状をなし，長さ17～20cmを測る。040で2点，048で3点出土している。048ではスギの板目取り材を用いた御敷の側板が出土している。



第20図　　木製品実測図1（1/4）



第21図　木製品実測図2（1/8）

計量具・文房具　048ではヒノキの板目取り材を用いた木札がある。長さ10.3cm＋α，厚さ0.5cmを測り，片端から1.5cmの両側に紐掛かりを持ち片面に墨痕が見られる。

建築部材（第21図１～４）　柱・壁・鴨居などが出土している。１は針葉樹を用いた間仕切り用の鴨居で，中央に幅１cm，深さ0.7cmの間仕切り襖を組み合わせる溝があり，中心間60cm前後に間仕切り襖の柄を組合わせるための柄孔が設けられている。柄孔は長さ６cm前後，幅2.8cm，深さ2.5 ～ 2.8cmを測る。また，間仕切り襖組み合わせ溝の両側に長さ66.8cmを測るスギの板目取り材を用いた棒が埋め込まれている。この棒は横断面形方形で２×2.4cmを測り，間仕切り未使用の時に組み合わせたもので，襖使用時は取り外し，間仕切り補強のため飾り板などを組み合わせたか。長さ127.1cm＋α，幅15 ～ 17cm，厚さ6.5cmを測る。２は，スギの板目取り材を用いた柱で，片側に幅3.5cm，深さ２cmのＬ字をなす開き戸受けがあり，両側に幅1.7cm，深さ２cmと幅１cm，深さ1.2cm前後の壁板差し込み溝をつくりだしている。長さ81.4cm＋α，幅約7.5cm，厚さ約6.9cmを測る。２点とも土留め構築材として再利用されており，杭列１出土。３，４はヒノキの板目取り材を用いた板で天井板と考えられる。２点は，片方端部付近に長さ４cmで2.5cm幅のコの字型の切り込みを持ち，釘が同じ間隔で開けられ，同一材の可能性が高く，土留め構築材として使用される前は一枚板であった可能性が高い。一枚板とすると片方端部の近くに４×５cmの方形穴を持つことになり，柱柄と組み合わさる柄孔となること，４の側面に釘が見られることから天井板とした。３，４は長さ147.5cm＋α・128cm＋α，幅４～５cm・4.5 ～ 5.2cm，厚さ1.4 ～ 2cmを測り，２点とも050出土。050からは，他にスギの板目取り材を用いた板２枚が出土している。長さ120.5cm＋α・123cm＋α，幅5.3cm・5.3cm，厚さ1.3cm・1.3cmと幅・厚さが同じであり，31cm・32cm・28.5cmと片端から17cmから30.5cm・32.5cm・28.8cmとほぼ同じ間隔で釘が打たれており，一枚板の可能性もある。また，片端のみ厚さ1.2cm弱と薄くしており壁板と考えられる。杭列１からは，スギの板目取り材を用いた扉の閂も出土している。

器具材（第20図６・第21図５・６）　板と棒がある。第20図６はスギの板目取り材を用いた板で，片端は半円状に仕上げており，御敷などの蓋か。第21図５はスギの柾目取り材を用いた棒で，片端は薄く仕上げ，他端は削りを入れ少し薄めに上端から19.6cm，40cm開けて釘が打たれている。長さ92.4cm，幅３cm，厚さ2.2cmを測る。第21図６はスギの板目度入り材を用いた棒で図上端右を斜めに削り中央を残し，左は段を設け組み合わせ部を造り出し，目釘を左側面から打ち込んでいる。上端から21.5cm，40cm開け第21図５と組み合わせた釘痕があり，上端付近の組み合わせ部にも釘抜き孔が見られる。長さ103.4cm＋α，幅8.8cm，厚さ5.3cmを測り，５とともに杭列１の出土である。

以上の木製品は，焼いた棒で鼻緒孔を片側穿孔することが15 ～ 16世紀には始まっていたことがわかるとともに，建築部材の鴨居や窓の開き戸受けを持つ柱の存在は商人の町である中世博多の繁栄を垣間見る資料であるといえる。

1　第1面全景（北東から）

2　第2面全景（南西から）

3　006遺物出土状況（北東から）

4　015遺物出土状況（南東から）

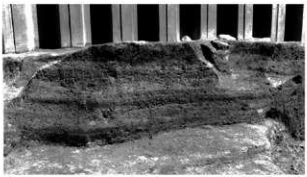
5　015下面遺物出土状況（南東から）

6　035（北から）

7　041（北東から）

図版２

1　道路状遺構（北西から）



2　道路土層断面南東側（北西から）

3　道路中央断面（南東から）

5　第３面流路020下面（西から）

4　道路土層断面南東壁（北西から）

6　第３面流路020（南から）

7　042遺物出土状況（西から）

1　調査区南西側第4面全景（南西から）

2　流路040（西から）

3　流路040（東から）

4　杭列1（南から）

5　杭列1（東から）

6　杭列1横板（西から）

図版４

1　杭列１，３（南東から）

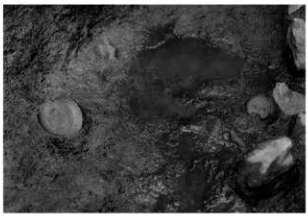
2　杭列１，３（西から）

3　杭列２遠景（南から）

4　杭列２（南東から）

5　杭列２（南から）

6　流路040底面土師器出土状況（西から）



1　流路040底面土師器出土状況（南西から）

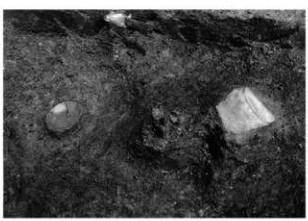
2　流路040東岸土師器出土状況（南東から）

3　調査区北東側第４面全景（南西から）

4　調査区北東側第４面全景（西から）

5　調査区北東側南東壁（北から）

6　調査区北東側北西壁（南から）



7　048底面遺物出土状況（北西から）

8　048板草履出土状況（西から）

図版６

1　048木製下駄出土状況（北から）

2　048木製下駄出土状況（南西から）

3　048上面木製下駄出土状況（北西から）

4　木製品・漆器出土状況（南東から）

5　048木材・遺物出土状況（北西から）

6　第５面全景（南西から）

7　050（西から）

1　050（南東から）

2　050礫一部除去後（南から）

3　050木柵部分（西から）

4　050木柵部分（北から）

5　050木柵部分（北西から）

6　敷地南角トレンチ（南西から）

第21図－１

第21図－２

第21図－３

第21図－４

第21図－５

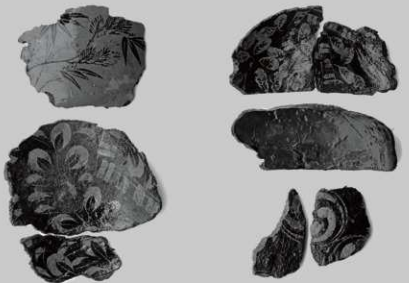
第21図－６

第20図－１

第20図－３

第20図－４

第20図－５


漆　器

木製品写真

抄　　録

ふりがな	はかた161
書名	博多161
副書名	博多遺跡群第207次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1341集
編著者名	井上繭子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2018年３月26日
所収遺跡名	博多遺跡群第207次
所在地	福岡市博多区店屋町170番２
市町村コード	40132
遺跡番号コード	0121
北緯・東経	北緯33° 35′ 44″・東経130° 24′ 29″
調査期間	20160701 ～ 20160829
調査面積	147㎡
調査原因	簡易宿泊所建築
種別	集落
主な時代	中世～近世（15世紀～ 17世紀）
主な遺構	道路状遺構・流路・杭列・土留め施設
主な遺物	土師器・輸入陶磁器・瓦・木製品
特記事項	道路状遺構及び流路，砂丘落ち際に設けられた土留め施設が検出された。
要約	本調査地点は，博多遺跡群の中央付近に位置する砂丘の北西端に位置する。隣接した第124次調査地点で確認された道路状遺構，流路の延長部分が検出された。流路には護岸施設，また，砂丘の落ち際で砂丘を画するように設置された土留め施設が検出された。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1341 集

博多 161

― 博多遺跡群第 207 次調査報告 ―

2018年（平成30年）３月26日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　協文社印刷株式会社
　　福岡市西区小戸４丁目24番５号